

特集

眼の健康と QOL

私たちは眼や耳や鼻、皮膚などの感覚器を使い、自分の周りの情報を得て、安全に生活しています。特に、これらの情報の多くを眼から得ており、視覚が障害されると生活への影響が大きいことが容易に想像できます。

世界の中途失明の原因は、2010 年の WHO 調査によると、白内障 51%、緑内障 8%、加齢黄斑変性 5% となっており、白内障が過半数を占めています。

一方、公益社団法人日本眼科医会によると、2007 年時点で日本には 164 万人の視覚障害者、このうち失明者は 18.8 万人いると推定され、失明の原因は男女ともに第 1 位が緑内障、第 2 位が糖尿病網膜症となっています。

白内障や緑内障、加齢黄斑変性などの眼疾患は加齢とともに発症する確率は高まります。これらは失明につながる重篤な疾患でありながら、自覚症状がないため未受診のまま長期間経過し、初診時には既にかかなり進行している状態の患者さんも多いと言われています。

わが国は、前例のない速さで高齢化が進み、世界でも類を見ない超高齢社会を迎えています。2015(平成 27)年の国勢調査では高齢化率は 26.7% と世界最高水準となっており、2030 年には視覚障害者は 200 万人に達すると推定されています。

そこで本号では、視覚障害の観点から、原因となる眼疾患について公衆衛生従事者向けに最新の知見を解説していただくとともに、視覚障害者の生活の質の維持向上を図ることを目的に企画をしました。また、独立行政法人国民生活センターの公表を発端として、2009 年から高度管理医療機器に分類されたカラーコンタクトレンズ等の問題についても取り上げました。